

六十年一昔

福重 紀子

1Aから高3Mまで一番クラスが一緒だったのは鍵山雅子さんだった。品行方正、学力優秀で先生方のご自慢の一人だった。休み時間に席の中頃に集まって他愛ないおしゃべりをしている時なども、だまってにこにこしながら、輪の中に入っていた。

その後女子大でも二年間一緒だった。その頃公園の噴水の段で芝生に座った二人の写真をとってくれたのは石丸さんか毬さんだったと思う。何年かたって香川県で同窓会があるので是非とのことだった。丁度母の具合がよくなかったのでおことわりした。もう会えないかもしれないから……が終わりの言葉で、それから間もなく亡くなった。体調のよくないことが分かっていたのでしよう。

石丸さんは一緒の講義の時間は、いつも自分用の座布団に正座して、私の後ろの椅子だった。しばらくすると紙包みが手渡されて中身は甘納豆とおかきだった。中3になるとD組の私の席の前後は、田中繁子さん、黒瀬恭子さん、弘田春美

さんだった。すぐ仲間に入れてくれて、 $(A+B)$ 2乗、 $(X+Y)$ 2乗の分からない私にそれは熱心に教えてくれた。恩は忘れないが、成果は代数の先生が迷惑する位だった。

高1の時、その一年間だけの試みで、ホームとクラスが別だった。クラスは数学が二年程度上級とのことだった。私は最も離れた級を選んだ。北舎二階の隅の教室だったが満員だった。机間が狭く注意を要した。いつかそそっかしく席を立てて川村容三さんの鉛筆入れを落としたことがあった。私は謝ったが川村さんは涼しい顔をしていた。二度目も同じ表情だった。後から思うと頭の中は黒白の目で埋まっていたに違いない。

卒業して何年もたって、私はやっと山奥の小さな中学校に就職できた。夏休みのある日、井上の古書店の前で川村さんと出会った。川村さんはここにこして、僕が父の本を持ち出してここに置くと、父が黙って買い戻していると云った。父上はその頃県立の図書館長でいらした。井上から東への通りに証券会社があつて、そこに席をおいていると云った。すぐ近くに喫茶店がいくらかもあるのに、どちらも座ることを思いつかなかつた。高新的スポーツ欄のトップに、土佐の本因坊の見出しがあつたから、本因坊は偉いものだと思つた。

田中さんは華道の師匠、黒瀬さんは病院長の母、弘田さんは業界NO1の実業家になった。